ボクら、こう考える。私たち、こう思う。

―若者たちの男女共同参画―

平成18年8月に実施した「※さいたま市男女共同参画に関する市民意識調査」では、「男は仕事、女は家庭」という固定的性別役割分担意識が、依然として根強く残っているという結果がでました。
だれもが〝自分らしく〟生きるためには、男女がお互いの人権を尊重し合い、一人ひとりの個性と能力を発揮できる社会の実現が重要です。
これからの社会を担っていくのは現代の若者たちです。
若者たちの意識から、これからの社会が見えてくるかもしれません。
「学生」「社会人」「結婚・子育て」とそれぞれのライフステージにいる若者たちに、男女共同参画社会についてインタビューしました。

何かをしようと思ったら、
『女だから』なんて
あまり関係ないと思います。

今村　真理 さん（25歳）
ネイルサロン経営者

教師になったら、
男女の区別無く、
子どもの個性を伸ばせるような
教育をしていきたいですね。

牧　真弘 さん（20歳）
大学生

家事は分業で、
やれる方がやるように
しています。
お互いを気づかうように
心がけています。

栗田　尚起 さん（31歳）
会社員

お互いに助け合うことができれば
子育ても仕事も、楽しく無理なく
やっていけると思います。

栗田　奈津子 さん（29歳）
看護師

※本調査の報告書及び概要版はさいたま市ホームページ（http://www.city.saitama.jp/index.html）で全文をご覧いただけます。
トップページから「広報・情報公開」の「男女共同参画」をクリックしてください。

性別は関係ありません。スタートラインは一緒です。

牧　真弘 さん（20歳）

「僕が入っていた少年野球チームのコーチのような先生になりたい」そう熱く語る牧さん。将来は学校の先生を目指している埼玉大学教育学部の二年生です。

現在は実家から大学へ通っている牧さん。共働きの両親をもち、自分のことは自分でやるように育てられました。

「もちろん僕も家事はやっていますよ。女性だからといって姉が家事を多く分担していることもないですしね」。小さいときからそのように育てられてきたので、自分が家事をしていることへの抵抗もありません。

大学の中でも、リーダーシップをとる人間に女性も多く、男女関係なく活躍していると言います。

「いやぁ、女性は活躍していますよ。むしろ女性の方が積極的なんじゃないでしょうか。『女だから、男だから』という定義が僕にはしっくりこないんですよ。性別は関係ありません。スタートラインは一緒です。能力のある人間がリードしていけば良いのではないでしょうか」

これからの自身の結婚観も伺いました。

「いつか家庭をもったら、強いおやじになりたいです」。しかし、牧さんの言う強い父親は、亭主関白で、どんと座って威張っているというイメージではないようです。

「相手の女性が出産後に社会に出て仕事をするのは、自然な流れであっていいと思います。子どもができたら、自分でおむつも替えて、ミルクも作ったり、進んで子どもの世話をしたいですよ」と当たり前のように牧さんは話します。

「『男は仕事、女は家庭』という固定観念としてあったものは僕たちの世代にはもう無いと思うんですよね」

これからは牧さん自身が生徒に教育していく立場になります。

「僕は少年野球で育ったようなものです」

小学校から高校まで野球を続けていた牧さんは少年野球での経験をこう語ります。

「少年野球での活動を通じていろいろなことを学びました。年長者との付き合い方や、様々なルール。今の自分の基礎はそこで出来上がったといっても過言ではありません。地域での活動は大切だと思います」

教師になる夢も、子どもの個性を尊重し、成長させてくれた少年野球チームのコーチの影響があったからこそです。

「これから教師になったら、男女の区別無く、子どもの個性を伸ばせるような教育をしていきたいですね」と、真っすぐな目で未来の教師は語ります。

男女がともに豊かに・楽しく暮らすために 若者たちへのメッセージ

「いろいろな人がいる」　中沢けい

鳥や獣、それに魚や蛙に虫、時には植物にもみんな雄と雌がいる。人間には男と女がいる。どうしてこんなふうになったのだろう？　二つの性があったほうが、どうも遺伝子を残しやすいのだという説明を聞いた。「ああ、なるほど」と思う。でも人間の男女は、鳥や獣、魚や蛙や虫のように単純ではない。ただ遺伝子のためにだけ生きているわけでもない。いや、人間以外の生き物だって、きっと遺伝子のために生きていると思っているわけではないだろう。

女がいて、男がいて、そのほうが世の中がおもしろいから、きっとそうなっているのだろうと言うのも、一つの考え方だ。遺伝子を残すためと言う科学的な考え方ほど信頼性がある考え方には感じられないかもしれないけれども、反対に世の中の人が全て判子で押したように同じであったらと想像してみれば、この考え方もあながち悪くはない気がしてくる。すべての人が同じ顔、同じ頭、同じ身体を持っていて、何をするにも同じ行動をするとしたら、それはつまらないと言うところを通りこして、なんだかそら恐ろしいことだ。

違いを楽しむという能力は、本能や感受性だけではなく、少々、理性というものが必要になってくる。おそらくありとあらゆる生き物の中で、人間が一番違いを楽しむ能力に恵まれているのではないのだろうか？

世の中にはいろんな人がいる。いろんな人がいてそれぞれ別々の能力を持っているから、協力することも共同することもできる。違いを楽しむためには、個性というものをお互いによくよくと知ることが大事になってくる。個性を知るためには、心で感じることのほかにちょっとだけ頭で考えることも必要になる。

中沢けい（なかざわけい）／小説家。1959年生まれ。高校在学中に書いた小説『海を感じるとき』で群像新人文学賞受賞。60万部のヒットとなった。著作に『野ぶどうを摘む』『水平線上にて』（野間文芸新人賞）など多数。中沢けい公式ウェブサイト「豆畑の友」http://www.k-nakazawa.com/